

中学校における部活動適応感を高めるための部活動会議の効果の検証

土方香樹*・赤坂真二**
(平成29年8月31日受付；平成29年11月9日受理)

要 旨

本研究では、中学校における部活動適応感を高めるために、クラス会議の要素を用いた「部活動会議」のプログラムを開発することと、部活動適応感を高める上での課題である学年を超えた活動としてのプログラムの有効性を検討する。本プログラムの内容は、先行研究に基づき①コンプリメントの交換、②小グループでの目標設定・振り返り、③小グループでのアドバイスタイム、④全体での目標設定・振り返りプログラムとから成り立つ。A県公立中学校バレーボール部に適用し、その効果を尺度や振り返り用紙から検討した。部活動会議プログラムを実施した結果、部活動適応感が高められることが示された。また、部活動会議アンケート・事後振り返りアンケートの結果から、学年を超えたプログラムとしての有効性も示唆された。さらに、使用した尺度の項目ごとに相関を分析したところ、学年を超えた部活動会議として活動するためには、部員全員が協力して取り組むことが最も影響を及ぼしていることが示唆された。

KEY WORDS

部活動適応感 クラス会議 部活動会議 学年を超えたプログラム

1 問題の所在と目的

2008年に改定された中学校学習指導要領の中で、初めて部活動の意義や留意点が規定され、部活動は教育の領域として学習指導要領第1章第4節2の(13)に学習との関連が明記された⁽¹⁾。また、運動部活動の在り方に関する調査協力会議(2013)では、部活動の在り方について、「スポーツの技能等の向上のみならず、生徒の生きる力の育成、豊かな学校生活の実現に意義を有するものとなることが望まれる」と述べられており⁽²⁾、近年の部活動に対する必要性が述べられることが多くなった。

角谷(2005)は「部活動は中学生にとって重要な人間関係形成の場であり、部活動の集団が(運動部か文化部によらず)そのような場を提供する役割を果たしている」と述べている⁽³⁾。また、橘川・高野(2008)は「クラスでの欲求満足度の低い中学生にとって、部活動は学校生活への満足度を高めてくれる要因になりうる」と述べている⁽⁴⁾。岡田(2009)は、「部活動に積極的に参加している生徒は学校生活のさまざまな領域で良好な状態にあるだけでなく、心理的適応にも高いといえ、部活動が学校生活の重要な支えとして機能している」と述べている⁽⁵⁾。以上のことから、部活動が人間関係の形成に影響し、学校生活においても大きな影響を与えていることが先行研究で示されている。

しかし、文部科学省(2014)によれば、平成25年度に30日以上学校を欠席した全国の児童生徒(公立小・中学校)115,784人のうち、不登校状態となったきっかけとして、学校生活に起因する「クラブ活動、部活動への不適応」をあげる者は1.7%(1,982人)である⁽⁶⁾。割合こそ小さいが、2,000人近くの生徒が部活動が原因で不登校となっている現実は無視できないだろう。

高知県スポーツ教育センター(1993)では、「中学生が部活動を中途退部の理由として挙げる割合が高いものは人間関係で、部活動を継続するか否かは部活動内の人間関係によって大きく左右される」と述べている⁽⁷⁾。また、稲垣(1996)は「部活動集団内における対人関係での挫折体験が中学生の精神衛生や自我意識に大きな影響を与える」と述べている⁽⁸⁾。以上のことから部活動内での人間関係が中学生の学校生活に影響を与えていることが分かる。

それでは、部活動内での良好な人間関係を築くための取り組みについての先行研究について検討していく。河村(2016)は「集団に所属する生徒たちの間に意見交換や行動を生徒たちが共有することが、部活動満足感を高める」と述べている⁽⁹⁾。また、杉本(2015)は「部活動で行う生徒だけで主体的に話し合わせるミーティングが、チームの目標を検討したりする場合に有効である」と述べている⁽¹⁰⁾。以上のことから部活動において生徒の主体的な活動の有効性が示唆される。

*妙高特別支援学校 **学校教育学系

部活動内での生徒の主体的な活動により人間関係を高める活動について、橋本(2008)らは、中学校サッカー部員を対象に、自己理解・他者理解・自己受容・自己主張・信頼体験・感受性の促進を目的とした、構成的グループ・エンカウンターを部活動終了後に全10回行った。その結果、「競技意欲」「闘争心」を低減させ、「作戦能力」「判断力」が向上した。しかし、「協調性」の向上は数値としての上昇が見られなかった⁽¹¹⁾。「協調性」のみ高まらなかったということは、部活動内での人間関係を高める取り組みとしての有効性は示せていないだろう。このことから、部活動内の良好な人間関係を築くより効果的な取り組みが必要となる。また、河村(前掲)は部活動について、「従来教員たちの経験則で取り組まれてきたものにエビデンスが求められ、その評価の上でより効果が期待される手法を選択し、取り組んでいくことが必要となってきた」と述べている⁽¹²⁾。このことから部活動に対し、先行研究に基づいた新たな取り組みの必要性であることが分かる。

橋川・高野(2003)は、部活動内での人間関係について測る尺度として使用している部活動適応感について、「部活動適応感とは、部活動に充実感を感じ、熱中できること・部活動での仲間を受け入れられていること」であり、「部活動適応感は学年間で差が生じる」と述べている⁽¹³⁾。また、越・関澤(2009)は、「異学年間での人間関係の支援関係について、更に検討する必要がある」と述べている⁽¹⁴⁾。以上のことから、学年をこえた部活動内での人間関係を高めることの難しさを示している。

このように、部活動での人間関係を高めることにおいては、様々な課題が指摘できる。しかし、部活動に特化した人間関係を高める活動の先行研究は管見の限り見当たらない。そこで、部活動だけに絞らず、学校生活全体において人間関係を高める活動の先行研究を検討していく必要があるだろう。

学級や学校生活において、生徒同士の人間関係を高める活動には、様々な研究がなされている。岩瀬(2013)は、「プロジェクトアドベンチャーはグループでの遊びや冒険活動を通じたチームワークや友達の協力、成功体験、達成感を体験し、友達との信頼関係を築くプログラムである」と述べている⁽¹⁵⁾。足立・佐田久(2015)はソーシャルスキルトレーニングについて、「学校生活の中のあらゆる機会を通して、意図的・計画的に他者と関わる機会を増やし、人間関係を築くための具体的なプログラムである」と述べている⁽¹⁶⁾。この2つの取り組みは、いずれも学校生活における人間関係を高める取り組みではあるが、教師の意図的、計画的な直接的関与に依存する活動であり、生徒の主体性が求められる部活動の特質とは合致しない。

古庄(2014)は、クラス会議について、「クラスの様々な問題や計画を自分たちで話し合い、自分たちの力で建設的に解決するものごとの決定に等しく責任を負う活動である」と述べている⁽¹⁷⁾。赤坂(2014)は、クラス会議により児童の良好な人間関係が築かれ、学級満足度が上昇することを見出している⁽¹⁸⁾。このクラス会議は、生徒の主体的な活動であるため、部活動での主体的な活動の有効性である点と合致する。また、人間関係の形成に有効であるという点から、部活動の課題を解決できる可能性がある。

これまでの先行研究を踏まえると、部活動に特化した良好な人間関係を築く研究は成されていないが、学校生活においては、生徒の主体性に基づく良好な人間関係を築く活動として、いくつかの有効な手立てが研究されている。部活動においては、生徒の主体的な活動の有効性が示されているため、生徒の主体性によって運営されるクラス会議の要素を取り入れた活動を行うことにより、部活動内で良好な人間関係を築くことが期待できる。

そこで本研究では、学級内での人間関係を高めるクラス会議の要素を取り入れた生徒の主体的な活動が、部活動内での人間関係の向上に有効であるのか検証する。なお、本研究では、部活動での人間関係の向上を、先述で示した橋川・高野の部活動適応感とし、その高まりを検証する。また、クラス会議は学級用のプログラムで構成されているため、先行研究に基づき新たな部活動に適合したクラス会議のプログラムを作成する。本研究では当活動を「部活動会議」とする。

2 研究の目的

中学校において、クラス会議の要素を用いた話し合い活動（以下、部活動会議）の部活動適応感を高めることに対する効果を検証する。

3 研究の方法

3.1 研究対象

A県公立中学校 女子バレーボール部 9名

3.2 対象の選定理由

研究校は、小学校から一学級で人間関係が固定化している。更に、2年生にバレーボール経験者が少なく、1年生に経験者が多いため、2年生が1年生に対し、抵抗感を持っているという実態がある。そのため、橘川・高野が示している学年間での課題があることとあてはまるため、対象とした。

3.3 調査期間

2016年9月25日～12月10日

3.4 実施方法

2週間に1回、練習後に30分程度の活動を全5回実施した。

3.5 実施プログラム

3.5.1 基本方針

先述した通り、学級でのクラス会議においては、赤坂(2016)が開発したクラス会議プログラム⁽¹⁹⁾があるが、先行研究において、学年間で部活動適応感に差が生じていることから、学年をこえたプログラムを作成することが必要となる。その課題を克服したプログラムを作成する。以下、詳細に述べる。

3.5.2 プログラム内容

①コンプリメントの交換

最初に赤坂のクラス会議プログラムと同様に、コンプリメントの交換を行う。コンプリメントとは、ポジティブな雰囲気を作るための、ほめ言葉などの相手への肯定的な感情の交換である。小グループにて、時間を設定し、隣の人の良い所を発表し合った。

②小グループでの個人目標設定・振り返り

赤坂プログラムを参考に、編成した異学年間での小グループ内にて部員の個人の目標を設定し、目標に向けて取り組むことをグループメンバーに発表した。または目標を設定済みの場合は、目標が現在何%達成できているのか、自己評価を発表する振り返り活動を行った。

③小グループでのアドバイスタイム

越・関澤(前掲)は「部活動において技能伸長の支援を互いに交換し合うことにより、部活動の適応感を高める」と述べている⁽²⁰⁾。この先行研究から、自分の目標に対する困り感をグループメンバーに伝え、輪番でアドバイスをするという活動を行った。

④全体でのチーム目標設定・振り返り

杉本(前掲)は「生徒のみで話し合うミーティングが、チームの目標の検討に有効である」と述べている⁽²¹⁾。この先行研究から、全員で円になり、チームの大会に向けての目標や、普段の部活動の問題点を改善するための目標を設定した。目標が設定済みの場合は、設定した目標が何%できているのか振り返り、目標の改善を行う振り返り活動を行った。

本研究では学年をこえた部活動全体としての効果を図るため、異学年で小グループを編成し、毎回グループメンバーを変更して行う。また、話し合い活動を行うにあたり、赤坂(前掲)のプログラムを参考に以下の話し合いのルールを設定した⁽²²⁾。

- ・全員が発言する
- ・人を責めない
- ・聞いていることを態度で示す

このルールを部活動会議を実施する初回にルールを守る意義とともに対象生徒に筆者が説明した。

3.6 分析方法

①部活動適応感アンケート

本研究では部活動内での適応感を測るため、橘川・高野(2003)が作成した中学生用学校適応感尺度の下位項目の部活動適応感のみを使用した(5・4・3・2・1)の5件法アンケートを作成した⁽²³⁾。この部活動適応感のアンケートを部活動会議第1回目の9月25日と、最終回の12月10日の計2回実施し、開始前と開始後の部活動内での変容を田中・中野(2012)の「js-STAR」を使用し、分散分析を行った⁽²⁴⁾。また、項目ごとの効果を測定するため、同様に「js-STAR」を使用し、相関係数計算を行った。

表1 部活動適応感アンケート 質問内容

質問内容
① 部活動はやりがいがある
② 部活動に集中できる
③ 部活動があるから学校は楽しい
④ 部活動に一生懸命取り組んでいる
⑤ 部活動は自分の生活になくてはならないものである
⑥ 部活動はみんなで協力してやっている
⑦ 部活動で部員として仲間を受け入れられている
⑧ 部活動で学年の異なる仲間ともうまくやっている

②部活動会議アンケート

本研究では、部活動会議の有効性を示す資料として、赤坂(前掲)が使用したアンケートを基に、(4・3・2・1)の4件法の部活動振り返りアンケートを作成した⁽²⁵⁾。赤坂は、クラス会議は、クラス会議を機能するための児童の望ましい姿を10の項目で示した。部活動会議が機能しているかを測る指標として、5回分の数値の変容を分析する。また、回ごとの部活動会議を生徒自身がどのように感じているかを見るため、自由記述欄を設けた。

表2 部活動会議アンケート 質問内容

質問内容
① 今日の活動は楽しかったか
② 今日の活動自分のためになったか
③ 自分はみんなの役に立っているか
④ 自分の気持ちや考えをわかってもらえたか
⑤ 自分は人の考えを分かろうとしたか
⑥ 自分は人の気持ちを考えて発言したか
⑦ 人を責めず、みんなで問題解決することができたか
⑧ 今日の活動で自分のいいところに気付いたか
⑨ 今日の活動で人のいいところに気付いたか
⑩ 自分は今日の活動で真剣に取り組んだか

③事後振り返りアンケート

部活動会議及び、プログラムごとの有効性を見取るものとして、事後振り返りアンケートを作成し、部活動会議最終回に実施した。質問項目には、(良かった・悪かった)の2件法を設定した。また、生徒自身が実施した部活動会議について、どのように感じているかを見るため、理由を記述する欄を設けた。また、この2件法の偶然確率を測るため、田中・中野(前掲)の「js-STAR」を使用し、直接確率計算を実施した⁽²⁶⁾。

表3 事後振り返りアンケート 質問内容

質問内容
① 他者の良い所を伝え合う活動はどうでしたか
② 小グループで話し合う活動はどうでしたか
③ 全体で話し合う活動はどうでしたか
④ 部活動会議の感想を教えてください

4 結果と考察

4.1 部活動会議の効果の検証

4.1.1 部活動適応感アンケート分散分析の結果

表4 部活動適応感アンケート 分散分析

時期	平均	標準偏差	F比
9月	34.5556	3.0591	3.78 *
12月	36.6667	3.0185	

+p<.10 *p<.05 **p<.01

バレーボール部全体の自作アンケートにおける部活動適応感を総合得点で、分散分析を行ったところ、9月から12月にかけて有意傾向 ($F(1, 8) = 3.78, p < .10$) で上昇した (表4)。10%水準の有意傾向ではあるが、田中・中野(前掲)は教育の世界において、学問のように慎重に判断していたのでは、有望な改善の機会を逃してしまう危険性があると述べ、実用上の改善・開発について判定する「探索発見型」の研究においては、10%を目安とできると述べている⁽²⁷⁾。このことから、部活動適応感が増える可能性を認めてよいだろう。

4.1.2 部活動会議アンケート項目別数値集計結果

表5 部活動会議アンケート 項目別集計結果

日付	①今日の活動は楽しかったか	②今日の活動は自分のためになったか	③自分はみんなの役に立っているか	④自分の気持ちや考えをわかってもらえたか	⑤自分は人の考えを分かろうとしたか	⑥自分は人の気持ちを考えて発言したか	⑦人を責めず、みんなの問題解決することができたか	⑧今日の活動で自分の良い所に気付いたか	⑨今日の活動で人の良い所に気付いたか	⑩自分は今日の活動で真剣に取り組んだか
第1回	3.4	3.6	3	3.6	3.8	3.6	3.9	3.1	4	3.8
第2回	3.6	3.3	3.3	3.6	3.8	3.7	3.8	3.1	4	4
第3回	3.6	3.4	3.2	3.8	3.8	3.8	4	3.3	3.7	3.9
第4回	3.9	3.8	3.6	3.9	4	3.9	3.8	3.6	4	4
第5回	3.6	3.8	3.6	3.8	4	4	3.8	3.7	4	3.9
第1回からの上昇値	0.2	0.2	0.6	0.2	0.2	0.4	-0.1	0.6	0	0.1

表5は、部活動会議アンケートの数値を集計し、項目ごとの全5回の平均点の数値である。③の「自分はみんなの役に立っているか」、⑧の「今日の活動で自分の良い所に気付いたか」という項目が、第1回から第5回にかけて0.6ポイント上昇している。この上昇は他の項目と比べ、一番上昇幅が大きく、特に影響があった項目であることが示唆される。

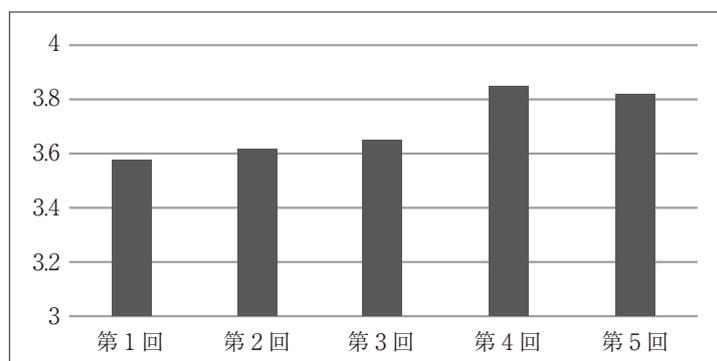


図1 部活動会議アンケートの全5回の数値の変容を表したグラフ

図1では、部活動会議アンケートの項目すべてを平均した数値をグラフで表したところ、項目によって多少の差はあるが、全て3以上であり、また、第1回から第5回にかけて、数値が上昇している。このことから、部活動会議が毎回正常に機能し、それが徐々に高まっていった可能性が示唆される。

4.1.3 事後振り返りアンケート「部活動会議の感想」記述集計結果

事後振り返りアンケートの「部活動会議の感想」を集計したところ、部員全員が部活動会議に対し、肯定的な記述をしていた。以下、記述内容である。

- ・部活動会議で、部の雰囲気少し変わったところがある気がします。
- ・いままでやったことなく、部活の雰囲気などもよくなったと思います。
- ・2週間ずつの間でも、少しずつ変わっていったこと分かった。これから少しずつ良くしていきたい。
- ・これからの部を少しでも良くできるような話し合いができた。
- ・とてもいい会議だったと思う。自分を振り返るいい機会だった。
- ・楽しくできたし、反省や良い所を知れてよかった。
- ・これからの部を少しでも良くできるような話し合いができて良かった。
- ・部活についてすごく真剣に話し合いができて、今後に生かしていきたいと思った。
- ・自分たちの良い所・悪い所・足りない所が分かってよかった。

記述を分析すると、「部」「自分たち」など部活動全体に対する記述をした生徒が9名中7名、「自分」に関する記述が9名中2名であった。このことから、半数以上の生徒が部活動会議により、部活動全体に肯定的な影響を与えたと感じていることが分かる。記述内容を見ても「部の雰囲気がよくなった」「部の雰囲気が少し変わった」など部活動会議により、部活動全体が変わってきている実感が生徒自身にあることが分かる。以上のことから事後振り返りアンケート部活動会議の感想の記述においても、学年を超えた部活動会議のプログラムとしての有効性が示されていることが分かる。

4.1.4 部活動適応感アンケートにおける項目ごとの相関

表6 部活動適応感アンケートの項目⑧「部活動では学年の異なる仲間ともうまくやっている」とその他の項目との相関

質問内容	相関係数
① 部活動はやりがいがある	0.01ns
⑧ 部活動で学年の異なる仲間ともうまくやっている	
② 部活動に集中できる	0.41ns
⑧ 部活動で学年の異なる仲間ともうまくやっている	
③ 部活動があるから学校は楽しい	0.09ns
⑧ 部活動で学年の異なる仲間ともうまくやっている	
④ 部活動に一生懸命取り組んでいる	0.13ns
⑧ 部活動で学年の異なる仲間ともうまくやっている	
⑤ 部活動は自分の生活になくはならないものである	0.19ns
⑧ 部活動で学年の異なる仲間ともうまくやっている	
⑥ 部活動はみんなで協力してやっている	9.33*
⑧ 部活動で学年の異なる仲間ともうまくやっている	
⑦ 部活動で部員として仲間に受け入れられている	3.89 ⁺
⑧ 部活動で学年の異なる仲間ともうまくやっている	

⁺p<.10 *p<.05 **p<.01

表6では、学年を超えたプログラムとして何が効果的であったか、より正確に測るため、部活動適応感のアンケートにおける学年を超えたものとして関係が強い項目とみられる、「学年の異なる仲間ともうまくやっている」という項目とその他の項目において、相関係数分析を行った。その結果、「部活動ではみんなと協力してやっている」という項目と中程度の相関が見られた ($r=0.756$, $F=9.33$, $df_1=1$, $df_2=7$, $p<.05$)。その他の項目とは強い相関は見られなかった。この相関係数分析の結果から考察すると、学年を超えた人間関係を高めるためには、部員として受け入れられることや部員と協力することが関連していることが示唆される。よって、部活動適応感アンケート、事後振り返りアンケートにおいて、仲間と協力していることに関わる記述から分析する。

4.1.5 部活動会議アンケート自由記述の分析結果

表7 部活動会議アンケートの自由記述における「みんな」「一人ひとり」「チーム」という言葉を含んだ記述の集計

日付	記述を書いた人数
第1回	9名中 3名
第2回	9名中 5名
第3回	9名中 5名
第4回	9名中 5名
第5回	9名中 7名

表7は、部活動会議アンケートの自由記述を、部活動適応感の「みんなと協力してやっている」という項目に関連していると思われる「みんな」「チーム」「一人ひとり」という言葉を含んだ、肯定的な意見を日付ごとに分類したものである。その結果、第1回、第2回においては、半数以下の生徒のみの記述であるが、第3回以降、半数以上の生徒がみんなと協力しているよう肯定的な記述をしていたことが分かった。以下一部の記述内容である。

- ・誰かの悩みをみんなで解決しようと、一人ひとりが積極的に意見を出して、とてもいいなと思いました。人のために行動できる人がたくさん周りにはいるのは良いことだと思います。
- ・チームの目標に関して、みんなでしっかり考えてよかった
- ・全員で輪になって、一人ひとりが意見を出して話し合いを進めていくがとても良いと思いました。記述内容から互いに協力し合っている様子がわかる。

「みんな」「チーム」「一人ひとり」といった、他者を意識する言葉の増加から、部員同士への協力に対する意識の高まりがうかがえる。以上のことから学年を超えた部活動適応感を高めるためには、部員同士の協力が重要であることが示唆される。

4.2 プログラムごとの効果の検証

様々な分析結果から、学年を超えたプログラムの有効性が示唆されたが、実施したプログラムの内、どの活動が有効性であるか、事後振り返りアンケートから検証していく。

4.2.1 事後振り返りアンケートの集計結果

表8 事後振り返りアンケートの集計及び直接確率計算の結果

質問内容	良かった	悪かった	直接確率計算	理由
①他者の良いところを伝え合う活動はどうでしたか？(コンプレットの交換)	9名	0名	**	・他の人の良い所もわかったし、自分の良い所を伸ばそうと思えたから ・良い所を言い合うことで、より意識して部活動ができた ・他の人はしゃべっている時、この人はあの子のこんな所に気付いてすごいなと思った
②小グループでの話し合い活動はどうでしたか？(小グループでのアドバイスタイム)	9名	0名	**	・アドバイスをみんなに教えてもらったから ・アドバイスをもらったりして生かそうと思った ・大勢いると言えない意見をパッと出せてよかった ・小グループで話すことによって話しやすかった
③全体で話し合う活動はどうでしたか？(全体でのチーム目標設定・振り返り)	7名	2名	+	・全員の意見がしっかり分かった ・お互いの良い所や悪い所が分かった ・部の悪い所の改善策を導きだせた

+p<.10 *p<.05 **p<.01

表8は事後振り返りアンケートの集計結果である。①他者の良い所を伝え合う活動、②小グループで話し合う活動に対し、全員が良かったと回答し、直接確率計算によると、その偶然確率は $p=0.0020$ (片側検定)の有意水準1%で有意であった。また、理由においても、「良いところに気付けた」「アドバイスをもらえて生かそうと思った」など、肯定的な記述が見られた。よって、①他者で話し合う活動、②小グループで話し合う活動は有効であったことが分かる。また、③全体で話し合う活動については、2名が悪かったと回答したものの、直接確率計算によると、その偶然確率は $p=0.0898$ (片側検定)の有意傾向であった。また、理由においても、全体で話し合うことにより、「お互いの良い所や悪いところが分かった」「改善策を導き出した」など、肯定的な記述が見られた。このことから、③

全体で話し合う活動は有効であった可能性が示唆される。この結果から、事後振り返りアンケートの結果から、作成したすべてのプログラムが有効であったことが示唆される。

5 全体考察

クラス会議の要素を用いた「部活動会議」が、部活動適応感を高めるための手立てとしての有効性を検討してきた。その結果、部活動適応感の数値が全体で上昇し、「部活動会議」が部活動適応感を高めることが示唆された。また、部活動会議アンケートの数値も回を重ねるごとに上昇し、事後振り返りアンケートの部活動会議の感想についての記述に関しても「部」や「自分たち」など部活動全体に対し、部活動会議が肯定的な影響を与えているという記述が見られたことから、学年を超えたプログラムとしての有効性が示された。

部活動会議アンケートの項目ごとの相関係数計算の結果、「部活動で学年の異なる仲間とうまくやっているか」という項目と「部活動はみんなで協力してやっている」という項目が中程度の相関が見られたことから、部活動内の学年を超えた良好な関係性は、部員同士の協力と影響し合っていることが部活動会議アンケートの自由記述の変容からも示唆された。

これらの結果から、部活動会議は、部活動内における良好な関係性の育成に有効であることが示された。また、部活動会議の内容に含まれるそれぞれの活動が、部活動内の協力的な態度を促し、部員同士の良好な関係性の育成に寄与する可能性が示された。

6 課題

①プログラムのさらなる改善

本研究では、部活動会議のプログラムのそれぞれの内容が有効であったと示唆されたが、「全体での目標設定・振り返り」について「悪かった」と回答した生徒が2名見られた。その理由について以下のように記述している。

- ・自分からあまり話せなかった
- ・活発に意見がでていたが、発言していない人がいて、皆が参加していなかった。

当生徒2名はレギュラーの生徒であり、よりチームを良くしたいという思いから、納得のいく話し合い活動ができなかったと感じ、「悪かった」と回答したと考えられる。部活動への意欲の高い2名から見ると、自分の思いを伝えたいし、一方で他の部員から多くの意見を出して欲しいと思っているようである。全体のモチベーションを高めるインストラクションや発言の均等性を保証するようなルールの工夫が必要である。

②他の部活動及び顧問教員による部活動会議の実施

今回は実践例の無い新たな活動であったため、筆者が主導で部活動会議を実施した。学年をこえた部活動会議プログラムとしてより一般化するためには、運動部・文化部の複数の部活動・複数の顧問教員により部活動会議を実施し、競技による差の検討や適切な教師の介入について検討していく必要がある。

③学校生活への影響の検討

本研究では、部活動内での適応感のみを検討したため、学校生活への影響までの効果の検証を示すことができなかった。部活動は学校生活の一部であるため、学校生活への影響は切り離せないだろう。そのため、クラス会議の有効性を測るために使用されている共同体感覚尺度を使用し、部活動会議が学校生活にどのような影響を及ぼしているのか検討していくことが必要である。

引用文献

- (1) 文部科学省：中学校学習指導要領，2008
- (2) 運動部活動の在り方に関する調査協力会議：「運動部活動の在り方に関する調査報告書～一人一人の生徒が輝く運動部活動を目指して～」，2013
- (3) 角谷詩織：「部活動への取り組みが中学生の学校生活への満足感をどのように高めるか：学業コンピテンスの影響を考慮した潜在成長曲線モデルから」，発達心理学研究，第16巻，第1号，26-35，2005
- (4) 橘川真彦：「中学校における学校適応感に影響を及ぼす要因(3)―部活動適応感及び総合学校適応感について―」宇都宮大学教育学部紀要，第1部58，1-19，2008-03-10
- (5) 岡田有司：「部活動への参加が中学生の学校への心理社会的適応に与える影響：部活動のタイプ・積極性に注目して」教育心理学研究 57(4)，419-431，2009-12-30
- (6) 文部科学省：「平成25年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について」，2014
- (7) 高知県スポーツ教育センター：「運動部活動に対するアンケート調査について」高知スポーツ教育センター研究紀要，1993
- (8) 稲垣応顕：「いじめられ登校拒否傾向に陥った女子中学生への感情表出トレーニング適用事例の討」暁星論業，1996
- (9) 河村明和：「部活動に参加する生徒たちの部活動満足度の要因の検討―一年間の関与的観察を通して―」教育カウンセリング研究Vol.7，2016
- (10) 杉本直樹：『部活動指導スタートブック 怒鳴らずチームを強くする組織作り入門』明治図書，2015
- (11) 橋本健・煙山千・清水安夫：「中学校サッカー部員を対象とした構成的グループ・エンカウンターの効果―運動部活動内における成長促進的支援の実践―」，学校メンタルヘルス，Vol.11：55-62，2008
- (12) 前掲(9)
- (13) 橘川真彦・高野玲子：「中学生における学校適応感の構造と測定」，2003
- (14) 越良子・関澤敬子：「中学生の部活動適応感における部活動内ソーシャル・サポートの機能」心理学研究 80(4)，335-331，2009
- (15) 岩瀬直樹・甲斐崎博史・伊垣尚人：『子どもたちが主役！プロジェクトアドベンチャーで作るとっても楽しいクラス』，学事出版，2013
- (16) 足立文代・佐田久真貴：「ソーシャルスキルトレーニング実施が学級適応感や自尊感情に及ぼす効果について」兵庫教育大学学校教育学研究 28，45-53，2015-11
- (17) 向後千春・堂坂更夜香・青木多寿子・赤坂真二・古庄高：「アドラー心理学とクラス会議で子どもの市民性を育てる(自主企画シンポジウム)」『日本教育心理学会総会発表論文集』(56)，144-145，2014-10-26
- (18) 赤坂真二：「アドラー心理学に基づくクラス会議プログラムの開発に関する研究―学級満足度の分析から―」臨床教科教育学会 臨床教科教育学会誌14-2，1-12，2014-10
- (19) 赤坂真二：『赤坂版「クラス会議」バージョンアップガイド みんなの思いがクラスをつくる！』，ほんの森出版，2016
- (20) 前掲(14)
- (21) 前掲(10)
- (22) 前掲(19)
- (23) 前掲(13)
- (24) 中野博幸・田中敏：『js-STARでかんたん統計データ分析』技術評論社，2012
- (25) 前掲(18)
- (26) 前掲(24)
- (27) 前掲(24)

Verification of the effect of club activities meeting to increase the sense of adaptation of club activities in junior high school

Kouki HIJIKATA* · Shinji AKASAKA**

ABSTRACT

In this research, we are planning to research and develop the program of club activities meeting to increase the sense of adaptation of club activities in junior high schools, and to develop a program that exceeds the age of the program, It aimed. In preparing this program, based on previous research, ① exchanging complement ② setting goal in small group / reviewing ③ advice time in small group ④ set goal in whole · reviewed. We applied it to the volleyball team 10 people and examined the effect from the scale and the retrofit paper. As a result of implementing the club activity conference program, it was shown that this program is a program that raises the feeling of adaptation to club activities. Analysis of the return paper suggested that advice time in small group is particularly effective in (1) complement exchange ③ in the program.